

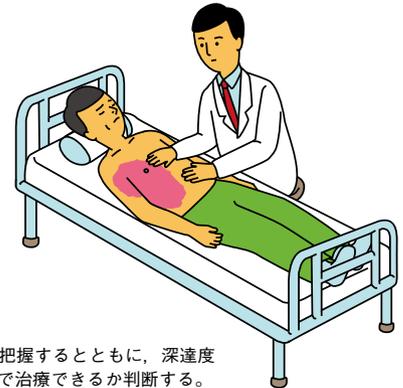
第15回 軽度の熱傷処置

はじめに

高温の物体にさらされると、組織が障害されて熱傷が生じる*¹。熱傷には、日常で遭遇する軽度のものから、まれではあるが、単に皮膚にとどまらず全身状態にまで影響を及ぼす重度のものまである。熱傷患者に対しては早期に重症度を判定して、外来治療が可能か、それとも入院か、あるいは専門施設に転送する必要があるのかを、まず判断しなければならない*²。

ここではその際に必要な重症度判定と、外来で治療可能な軽度の熱傷処置に関して解説する。初期治療として気道確保、輸液、さらには減張切開などの緊急処置を必要とする場合もあるが、通常そういった症例は最初から熱傷センターなどに搬送されるので、その場合の解説は他書に譲る。軽傷であると判断しても、常に全身状態の把握に努めて、適切な処置を取らなければならない。また、局所に対しても適切な治療を怠ると、後に述べるような合併症を生じてQOLを損なう場合があるため注意が必要である。

*¹ その他、化学物質による熱傷、放射線による熱傷、電撃による熱傷などがある。また、低温の物体でも長時間さらされると熱傷を生じる(低温熱傷)。日焼けも日光による熱傷である。
*² 後述の Artz の基準が参考になる。



熱傷患者をみたら、全身状態を把握するとともに、深達度と面積から重症度を判定。外来で治療できるか判断する。

重症度判定

1. 熱傷の深達度診断

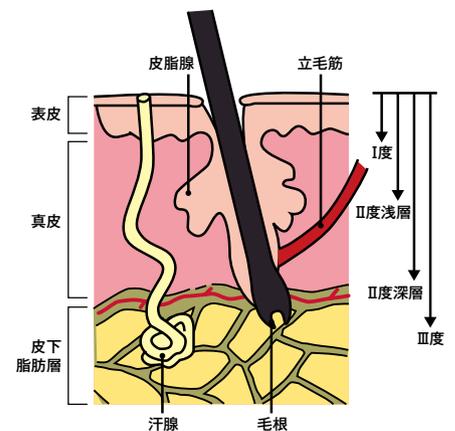
熱傷の深達度診断は日本熱傷学会の分類による*³。II度熱傷は浅層のもの(superficial dermal burn ; SDB)と深層のもの(deep dermal burn ; DDB)に分かれるが、その鑑別は難しいことが多い。ピンプリックテスト*⁴や抜毛テスト*⁵での鑑別も行われているが、治癒までの期間がII度浅層とII度深層では異なることによって、後から判定されることも多い。受傷機転からもある程度の推測はできる*⁶。

熱傷の深達度診断

	深達層	症状	皮膚の変化	治癒までの期間	後遺症
I度	表皮	疼痛	紅斑	1週間程度	まれに色素沈着
II度浅層	真皮中層まで	強い疼痛	水疱(底部発赤)	1~2週間	ときに色素沈着、色素脱失
II度深層	真皮下層まで	知覚鈍麻を伴う	水疱(底部白色)	1~2ヵ月	肥厚性癒痕
III度	皮下脂肪層まで	無痛	水疱なし、炭化あるいは羊皮紙様	2ヵ月以上	肥厚性癒痕、拘縮など

*³ 時間とともに変わることもあるので注意。II度熱傷が治療の過程で、感染や乾燥、物理的刺激によりIII度熱傷に進行しうる。

*⁴ 23 G程度の針で創部を刺し、疼痛があるかないかで鑑別する方法。



* 5 創部の体毛を抜く際、痛みと抵抗を感じるかどうかで鑑別する方法。

* 6 湯たんぼなどによる低温熱傷はⅢ度熱傷を生じやすい。



Ⅱ度浅層熱傷

水疱底は赤みを帯びている。



Ⅱ度熱傷（浅層と深層の混在例）

水疱は破れている。一部の水疱底は白色調。

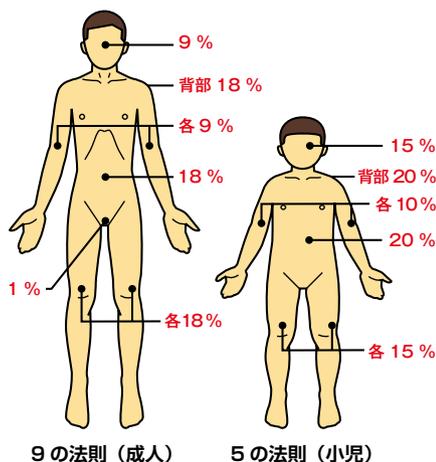


Ⅲ度熱傷

水疱なし。受傷部位は白色で少し光沢を帯び、羊皮紙様と形容される。



低温熱傷



9の法則（成人）

5の法則（小児）

就学前の幼児では頭が20%、両脚が10%と計算する。

2. 熱傷面積の推定

(1) 手掌法

手掌の面積がその人の体表面積の1%に当たるとして概算する方法である。非常に簡便であるが、熱傷が広汎な場合には使えない。

(2) 9の法則（成人）と5の法則（小児）

覚えやすく、救急の場での面積の概算には役に立つ。

(3) Lund and Browderの公式

頭と下肢の面積の割合を、年齢によって区分している。正確な熱傷面積を算出することができるが、煩雑である。あらかじめ表のようなものを用意しておいて、該当する部位に丸をつけて合計すると、各深度の熱傷面積が比較的容易に計算できる。